

博士論文要約

思春期女子の友人関係に関する研究

広島大学大学院 教育学研究科

学習開発専攻

D092003 山崎 茜

目次

- 第1章 本研究の背景と目的
 - 第1節 本研究の背景
 - 第2節 先行研究の課題と本研究の目的
- 第2章 思春期女子に特有な友人関係の背景
 - 第1節 目的
 - 第2節 閉鎖的で排他的な思春期女子の友人グループ
 - 第3節 peer-group への変容に関連する要因
 - 第4節 考察
- 第3章 中学生女子の友人関係行動の背景要因の検討（研究1）
 - 第1節 目的
 - 第2節 方法
 - 第3節 結果
 - 第4節 考察
- 第4章 中学生女子の友人関係の発達の差異の検討（研究2）
 - 第1節 目的
 - 第2節 方法
 - 第3節 結果
 - 第4節 考察
- 第5章 総括
 - 第1節 総合考察
 - 第2節 本研究の課題と今後の展望

引用文献

第1章 本研究の背景と目的

第1節 本研究の背景

思春期以降、友人は親からの心理的離乳の途上で大きな支えになるなど、人間の発達に重要な意味を持つ (Sullivan, 1953; 落合・佐藤, 1996)。そして女子は男子よりも友人関係を重視し、嫉妬深く、仲間を独占したがることなどが指摘されている (Dunn, 2004; 有倉, 2011, 他)。また、友人関係の発達的变化の男女差を指摘する研究もある (保坂, 1998; 有倉, 2011 等)。これらを概観すると、思春期以降、女子の友人関係は同質性を重視する **chum-group** から異質性を受容できる **peer-group** へと発達すると考えられる。特に思春期女子の友人関係では同質性が重視されるために、友人関係が非常にストレスフルなものとなり、心理的な問題やトラブルを抱え (佐藤, 1995; 須藤, 2012 等)、そのトラブルは陰湿で実態が把握しにくい (三島, 2003; 有倉, 2011) ことが指摘されている。このため、思春期女子の中でも特に、中学生女子の友人関係への予防的・開発的介入が求められている。しかし、これまでの友人関係研究では、中学生女子の友人関係を他の学校段階と比較して発達的变化を検討したものはある (榎本, 1999; 2000 等) が、学校段階の比較だけでは思春期女子の友人関係の発達の実相が十分に明らかにされてこなかった。また、これまでの友人関係研究では、なぜ **chum-group** の友人関係が閉鎖的で排他的になるのかについて十分には明らかにされておらず、この点についての実証的研究も見当たらない。思春期において中学生から高校生へ成長していく中で **chum-group** の友人関係から、**peer-group** の友人関係へうまく移行していくことが思春期の女子の発達課題ともいえ、その移行には、心理的距離は近いままに同調性のみを低減させる (石本・久川・齊藤・則定・上長・日潟・森口, 2009) ことが必要となると考えられるが、こうしたことに注目した実証的研究は乏しい。

第2節 先行研究の課題と本研究の目的

先行研究の課題として、①中学生女子の友人関係の発達を学年段階にそって詳細に検討したものはほとんどないこと、②思春期の女子の適応に重要と考えられる **chum-group** から **peer-group** への移行を、友人関係における同調性の低減という観点から実証的に検討する必要があること、③友人関係の発達には男女差があるために、女子の特性をふまえた検討が必要であること、④これまでの友人関係研究において用いられてきた友人関係の発達的变化の定義では、女子なりの友人関係における活動的側面の変化と友人に対する感情や欲求、態度の変化が整理して示されていないことが挙げられる。

以上のことから、本研究では、中学生女子を対象に、chum-group から peer-group への移行に必要と考えられる同調性の低減に関連する要因を検討する。まず、先行研究のレビューから、思春期女子の持つ同調性の背景要因を検討する。この仮説の検証のため、研究1では、レビューで得られた知見に基づき、実際に中学生の女子を対象に友人関係の行動と、内的側面である友人への考え・思いとの関連を同調性という観点から検討する。次に、研究2として chum-group から peer-group への移行に重要な年代であると考えられる中学生女子の友人関係における友人関係行動、友人への考え・思いの発達の相違を、学年にそって検討する。最後に、これらをふまえて総合的に考察する。

第2章 思春期女子に特有な友人関係の背景

第1節 目的

本章では、先行研究のレビューから思春期女子に特有な閉鎖的で排他的な友人関係の背景となる要因を明らかにし、実証的研究のための仮説を生成することを目的とする。

第2節 閉鎖的で排他的な思春期女子の友人グループ

思春期の中でも特に中学生時代の友人関係が難しい背景には、この時期が chum-group を形成する時期であり、内面の類似性の確認に固執し、互いに同調しようとする関係であることが関連している(須藤, 2012)。内面の類似性の確認に固執する傾向は中学生に強く見られ、中学生の女子は自分の所属する友人グループが排他的であると評価しており(有倉, 2011)、思春期女子の友人集団は男子に比べて閉鎖的であることが示されている(石田・小島, 2009)。

内面の類似性の確認のために、思春期女子は、友人との行動やモノ、秘密や話題の共有をしている(保坂, 1998; 高坂・池田・葉山・佐藤, 2010)。そして、そうした共有により、思春期女子は友人との親密性を持てる一方、友人グループは閉鎖的で排他的になり(高坂ら, 2010)、グループ内の同調圧力を産み出す(保坂, 1998)。そのため友人との率直なやり取りは阻害され、思春期女子は、消極的な同調行動傾向である同調性が高くなると考えられる。思春期女子の友人グループが閉鎖的で排他的になる背景には、思春期女子個人の持つ同調性と親密性の高さが影響すると考えられる。

ここで、思春期女子個人の持つ同調性と親密性の背景を検討したい。保坂(1998)は、gang-group や chum-group 段階での親密性が親からの自立に伴う不安を打ち消す役割を担っており、親からの自立に伴う不安が大きければ必然的に友人関係におけ

る親密性が高くなるとしている。そしてそれが友人関係からの自立という課題を難しくさせ **peer-group** への成長を妨げる可能性を指摘している。このような特徴から、思春期女子の友人関係は愛着関係であるとも捉えられ、そのために思春期女子は友人関係に固執しやすいと考えられる。つまり、思春期女子の友人関係は愛着関係であり、そのために友人関係が閉鎖的で排他的になっているとも考えられる。**chum-group** 段階にある思春期女子は、親からの自立に伴う不安を持っており、その上友人関係から孤立することへの不安を持っている。このように、思春期女子の持つ自立への不安や孤立への不安が親密性や同調性を生じさせ、その結果友人グループを閉鎖的で排他的にしていると考えられる。

第3節 **peer-group** への変容に関連する要因

chum-group から **peer-group** への変容に関連する要因として、思春期女子は友人から孤立する不安があるために同調性を持つ(上野ら, 1994) 一方で、友人との異質性・独立性を希求している(黒沢ら, 2005) という指摘がある。そして、友人から拒否されることへの不安は発達と共に減少することも指摘されている(杉浦, 2000; 高坂, 2010)。さらに、不安や同調性などのネガティブなものが低減することだけでなく、他者尊重や友人への信頼感などのポジティブな感情や考えが増加することが異質性を受容した関係への変化に関連することも示されている(榎本, 1999, 2000; 落合・佐藤, 1996)。

以上から、思春期女子の中には、異質性を受容した関係にはなっていないながらも異質性を認識し、独立性を希求している。その一方で、友人から異質に見られると友人から拒否されるのではないかという不安から、自分の意思を抑えて友人に同調する同調性を高く持つ。しかし、発達に従って自尊感情は高まり、友人から拒否されることへの不安が低減する。そして、他者への尊重や友人への信頼感が高まることで、異質性や独立性を希求する考えを発揮できるようになり、異質性を受容した関係になっていくと考えられる。

第4節 考察

思春期女子の閉鎖的な友人関係について概観すると思春期女子の友人関係が閉鎖的になる背景には、思春期に、女子が発達の中で友人を愛着対象としており、同調性を高くもっていることがあると考えられる。この背景として、同質性が重視される **chum-group** の中には、少しでも自分が異質に見られると友人関係から孤立するのではないかという不安があり、それが同調性の高さにつながるといえる。こうして友人を愛着対象とし親密性を確認することが、思春期女子の自立への不安や孤立への不安

を解消することにつながる一方で、親密性の確認に固執しすぎると同調性を高め、peer-group への変化が妨げられると考えられる。

こうしたことから、思春期女子の chum-group には発達を促すポジティブな機能(親密性を満たす)と、発達を阻害するネガティブ(同調性を助長する)な機能があると考えられる。そして、異質性を認められる関係になるためには、他者尊重や異質性・独立性への希求の高まりが関連すると考えられ、それは chum-group のポジティブな機能により育つものだと考えられる。

ところで、これまでは、親密性は排他性と表裏一体であると捉えられてきた(三島, 2004)。だが、石本ら(2009)の指摘から考えると、peer-group の友人関係を持つ者は、親密性は高いと考えられるが、集団の排他性は低い。そのため、この親密性と排他性が表裏一体であるという捉え方は妥当では無いと考えられる。たしかに、chum-group の段階では親密性が高い者は排他性の高い集団を志向する(三島, 2004; 有倉, 2011)が、その中で異質性や独立性を希求し葛藤している(黒沢ら, 2005)ことも指摘されている。

つまり、排他性や閉鎖性は個人が特性として持つものではなく、集団という関係性に生じるものであり、そこに個人の特性としての同調性や親密性が影響すると捉えられる。親密性と排他性が表裏一体、というよりはむしろ、親密性は閉鎖性と表裏一体であり同調性が排他性と表裏一体であると考えられる。

以上をまとめると、本章で生成された仮説は以下の3つになる。

- ① chum-group から peer-group への移行において、同調性の低減には友人関係における不安の解消と他者への尊敬、異質性や独立性の希求が高まることが関連する。
- ② chum-group から peer-group への移行には友人を愛着対象とし、内面の類似性の確認を通じた親密性の経験をすることも関連する。
- ③ chum-group には親密性を満たすポジティブな機能と、同調性につながるネガティブな機能がある。

以降の研究では chum-group のこの2つの機能に注目し、中学生女子の友人関係を実証的に検討する。

第3章 中学生女子の友人関係行動の背景要因の検討(研究1)

第1節 目的

研究1では、第2章において中学生女子の友人関係において重要であると示唆され

た同質性の重視、友人を独占する気持ち、孤立への不安、他者への尊敬、異質性・孤立性の希求に着目し、それらが友人関係行動に及ぼす影響を実証的に検討する。

第2節 方法

調査対象者と調査時期 調査対象者はA県内の公立中学校に通う女子135名。このうち回答に欠損の見られたものを除く121名を分析対象者とした。2010年12月に実施した。

調査内容 (1) 友人関係行動項目(17項目): chum-groupの特徴(保坂・岡村, 1986)をふまえ、榎本(1999; 2000)の友人関係の活動的側面についての質問項目を参考に質問項目を作成した。最終的に17項目を作成した。回答は5件法で求めた。

(2) 友人への考え・思い項目(29項目): 榎本(1999; 2000), 黒沢・森・寺崎・大場・有本・張替(2002), 楠見・狩野(1986), 落合・佐藤(1996), 高坂(2010)を参考に、友人に対する感情や欲求を表していると考えられる項目を作成した。最終的に29項目を作成した。回答は5件法で求めた。

第3節 結果

因子分析結果 (1) 友人関係行動の因子分析: 主因子法・プロマックス回転で因子分析を行い、固有値の減衰状況や因子の解釈可能性を考慮して、3因子解を採用した。最終的に“表面的共有行動($\alpha=.72$)”, “内面共有行動($\alpha=.62$)”, “自己開示的共有行動($\alpha=.63$)”が抽出され、一定の信頼性は確認された。(2) 友人への考え・思いの因子分析: 主因子法・プロマックス回転で因子分析を行い、固有値の減衰状況や因子の解釈可能性も考慮して、5因子解を採用した。最終的に“友人独占($\alpha=.88$)”, “友人尊重($\alpha=.79$)”, “排他不安($\alpha=.83$)”, “友人一体視($\alpha=.82$)”, “異質性・孤立性希求($\alpha=.71$)”が抽出され、一定の信頼性が確認された。

友人関係行動得点の分散分析 友人関係行動で抽出された3種類の行動のうち、中学生女子ではどの行動の頻度が高いかを検討する為に、行動の種類を要因とした分散分析を行った。その結果、有意な群間差が見られた($F(2,240) = 128.90, p < .001$)。Ryan法による多重比較(5%水準)を行った結果、表面的共有行動($M=4.21, SD=.79$) > 内面共有行動($M=3.06, SD=.78$) > 自己開示的共有行動($M=2.77, SD=.79$)であった。

Table1
友人関係行動に対する重回帰分析結果

	表面的共有		内面共有		自己開示的共有	
	β	t	β	t	β	t
友人独占	-.36**	-2.92	.27**	2.60		
友人尊重			.26**	2.63		
排他不安	.32*	2.50				
一体視			.44**	5.02		
異質性・独立性希求			.22**	2.75	.29**	2.85
調整済みR ²	.13**		.42**		.08*	

* $p < .05$ ** $p < .01$

友人への考え・思いの分散分析 友人への考え・思いで抽出された5種類の考えや思いのうち、中学生女子がどのような考えや思いを強く持っているのかを検討するために、考えや思いの種類を要因とした分散分析を行った。その結果、有意な群間差が得られた ($F(4,480) = 94.08, p < .001$)。Ryan法による多重比較 (5%水準) を行った結果友人尊重 ($M=4.16, SD=.63$) > 友人一体視 ($M=3.75, SD=.68$) = 異質性・独立性希求 ($M=3.63, SD=.70$) = 排他不安 ($M=3.58, SD=.87$) > 友人独占 ($M=2.46, SD=.92$) であった。

友人への考え・思いが友人関係行動に与える影響 友人関係行動の3因子それぞれに対する友人への考え・思いの影響について、各因子得点を用いて重回帰分析 (強制投入法) により検討を行った。また、VIFを算出して多重共線性の有無を確認した結果、多重共線性は無いことが確認された。結果をTable1に示す。

第4節 考察

研究1の目的は中学生女子を対象に友人関係の外的側面である友人関係行動と、内的側面である友人への考え・思いとの関連を検討することであった。仮説①について、研究1では同調性には友人から排他されることへの不安が関連していることが明らかとなった。一方、友人への尊重については同調性との関連は見られず、親密性に関連する可能性が示された。また、異質性・独立性への希求は最もpeer-groupに近いと考えられる友人関係活動と関連が見られた。だが、研究1では発達的変化を検討した訳ではなく、同調性や親密性の背景と考えられる友人への感情や考えは一部明らかになったものの、それらの増減が見られるのか、そしてその増減が友人関係活動にどのように影響するのかを検討できていない。以降、研究2においては発達的変化を検討する必要がある。

仮説②については、中学生女子が友人関係を愛着対象として捉えている可能性が示唆された。だが、これも発達的に検討できていない。研究2では友人を独占する気持ちや友人を一体視している考え方などがどう変化するのかを中心に検討する必要がある。

あるだろう。そして仮説③について、本研究の結果から、思春期女子の友人関係において、発達を促すポジティブな機能と発達を阻害するネガティブな機能があるという知見が一部支持された。続く研究 2 では、chum-group から peer-group への変容にこのポジティブな機能とネガティブな機能がどのように関わっているのかについても検討することが求められる。

第 4 章 中学生女子の友人関係の発達の差異の検討（研究 2）

第 1 節 目的

研究 2 では研究 1 で得られた、友人との内面共有行動が次段階の友人関係への変化に影響するという示唆に従い、中学生女子の友人関係行動と友人への態度について、学年を要因として検討し、chum-group から peer-group へという友人関係の発達の変化が見られるのかについて、詳細に検討することを目的とする。

第 2 節 方法

調査対象と時期 A 県内の公立中学校に通う女子 153 名を対象に調査を行った。このうち回答に欠損の見られたものを除く 136 名を分析対象者とした。調査は 2013 年 1 月に実施した。

調査内容 (1) 友人関係行動項目 (26 項目) : 研究 2 で抽出された項目に加え、gang-group, chum-group, peer-group という友人関係の発達段階(保坂・岡村, 1986)をふまえ、榎本(1999; 2000)の友人関係の活動的側面項目を参考に項目を作成した。榎本の調査時に用いられている文言を現在の社会背景に通じるものに置き換え、最終的に 26 項目を作成した。回答は 5 件法で求めた。(2) 友人関係態度項目 (43 項目) : 研究 2 で抽出された項目に加え、榎本(1999; 2000), 黒沢・森・寺崎・大場・有本・張替(2002), 楠見・狩野(1986), 落合・佐藤(1996), 高坂(2010)を参考に、友人に対する感情や欲求を表していると考えられる項目を採用した。また、黒沢ら(2005)の指摘を参考に、異質性の受容や独立性の希求を問う項目を作成し、最終的に 43 項目を作成した。回答は 5 件法で求めた。

第 3 節 結果

因子分析結果 (1) 友人関係行動の因子分析 : 最尤法・プロマックス回転で探索的因子分析を行った。固有値の減衰状況や因子の解釈可能性を考慮して、4 因子解を採用した。最終的に “peer-group 活動 ($\alpha=.83$)”, “内面共有的 chum-group 活動 ($\alpha=.81$)”, “表面共有的 chum-group 活動 ($\alpha=.73$)”, “gang-group 活動 ($\alpha=.72$)”

が抽出された。各因子の α 係数はいずれも高く、一定の信頼性が確認された。(2) 友人への考え・思いの因子分析：最尤法・プロマックス回転で探索的因子分析を行った。固有値の減衰状況や因子の解釈可能性も考慮して、6 因子解を採用した。最終的に“集団帰属優先 ($\alpha=.85$)”、“排他不安 ($\alpha=.83$)”、“友人尊重 ($\alpha=.86$)”、“友人分離不安 ($\alpha=.82$)”、“独立性希求 ($\alpha=.72$)”、“異質性受容 ($\alpha=.87$)”と命名した。因子の α 係数はいずれも高く、一定の信頼性が確認された。

発達の差の検討 友人関係行動と友人への考え・思いの各因子について、因子に含まれた項目の平均値を算出し下位尺度得点を算出した。算出された下位尺度得点を用いて、各因子について学年を要因とした分散分析を行い発達の差の検討を行った。その結果、1年生と比べ、2、3年生は peer-group 活動の得点有意に高いことが示された。また、2年生は他学年と比べ表面共有的 chum-group 活動と gang-group 活動が有意に高いことが示された。そして、内面共有的 chum-group 活動には学年での差は見られないが、その他の gang-group 活動、表面共有的 chum-group 活動、peer-group 活動については、1年生はどの友人関係行動も他学年に比べて低い。そして2年生では全ての友人関係行動において他学年、あるいは1年生よりも高くなり、3年生になると peer-group 活動のみが他の学年と比べ高くなっていた。一方、友人への考え・思いでは、排他不安については3年生が最も低く、友人尊重については2年生と1年生の間にのみ有意な差が見られた。また、独立性の希求には学年間で有意な差は見られず、異質性の受容は友人尊重と同じく2年生と1年生の間にのみ有意な差が見られた。

友人関係行動に与える影響要因の検討 学年ごとに peer-group 活動、内面共有的 chum-group 活動、表面共有的 chum-group 活

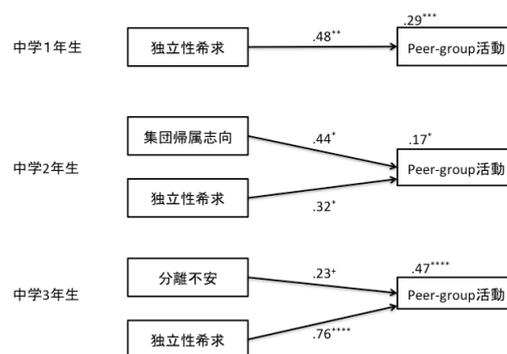


Figure1
peer-group活動を従属変数とした学年ごとの重回帰分析結果

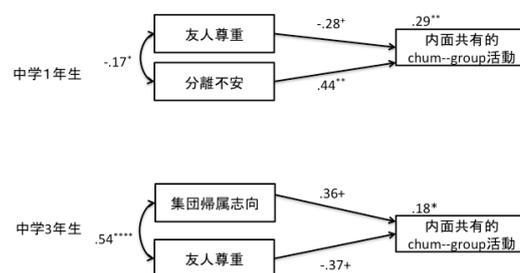


Figure2
内面共有的chum-group活動を従属変数とした学年ごとの重回帰分析結果

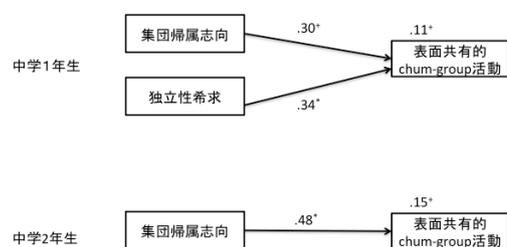


Figure3
表面共有的chum-group活動を従属変数とした学年ごとの重回帰分析結果

動それぞれに対する友人への考え・思いの影響を、各下位尺度得点を用いた重回帰分析（強制投入法）により検討を行った。その結果を Figure1, Figure2, Figure3 に示す。なお、VIF を算出して多重共線性の有無を確認したが、多重共線性は無いことが確認された。

第4節 考察

まず仮説①について、友人関係における不安の低減として、排他不安よりも友人との分離不安が低減することが重要であることが示された。さらに、異質性の受容や独立性の希求は、研究1で示された友人尊重についての示唆と同じく、学年が上がるに従って高まるというよりも、そもそも持っているものを友人分離不安の低減によって、表に出しやすくなることが chum-group から peer-group への変容に関連することが示唆される。次に、仮説②については、友人分離不安という友人への思いが抽出され、またそれが友人関係行動へ影響しているなど、思春期女子が友人を愛着対象として捉えていることが一部実証的に示された。最後に、仮説③について、本研究の結果から、思春期女子の友人関係において、発達を促すポジティブな機能と発達を阻害するネガティブな機能があるという知見が一部支持された。

第5章 総括

第1節 総合考察

本研究の目的は、友人関係の閉鎖性や排他性が高いと考えられる中学生女子を対象に、chum-group から peer-group への移行に必要と考えられる、同調性の低減に関連する要因検討することであった。このため、第2章では、思春期女子の友人関係に関する知見を整理し、友人関係の閉鎖性・排他性を規定する背景要因を検討した。その結果、思春期女子の chum-group には発達を促すポジティブな機能と、発達を阻害するネガティブな機能があるという知見を得た。そして閉鎖的な関係から、対人的に成熟した異質性を認められる関係になるためには、友人への尊重や異質性や独立性への希求の高まりが関連すると考えられ、それは chum-group のポジティブな機能により育つ可能性が示唆された。

研究1では、レビューで得られた知見に基づき、実際に中学生の女子を対象に友人関係の外的側面である友人関係行動と、内的側面である友人への考え・思いとの関連を検討した。その結果、内面共有行動と、表面共有行動、自己開示的話題共有行動が抽出され、それぞれへの内的側面の検討から、内面共有行動は chum-group のポジティブな機能に、表面共有行動はネガティブな機能に、そして自己開示的話題共有行動

は異質性を受容した関係へ関連する可能性が示された。

以上をふまえ、研究2では中学生女子の友人関係における友人関係行動、友人への考え・思いの発達の相違を、学年を要因として検討し、思春期女子の持つ同調性の低減に関連する要因を実証的に検討した。その結果、中学校では3年生が最も peer-group 活動が見られ、排他不安が他学年と比較して有意に低いなど、発達の差違の一側面が見られた。また、友人尊重や独立性の希求、異質性の受容には発達の高くなるというような明確な結果は得られなかった。

本研究で得られた一連の結果から、思春期女子の友人関係において、不安が解消、あるいは低減することが友人関係を成熟した関係へと進める可能性がされた。また、これまでひとくくりに chum-group として捉えられていた思春期女子の友人関係について、親密性を満たして発達を促すというポジティブな機能と、同調性を生じさせ発達を妨げるネガティブな機能があることが新たな知見として示唆された。

第2節 本研究の課題と今後の展望

今回の結果から、思春期女子の友人グループの閉鎖性や排他性を解消し、友人関係の発達を促すためには、思春期女子が持つ分離不安と排他不安という二つの不安を解消し、同調性を低減する必要があると考えられる。しかし、本研究では、排他不安や友人分離不安の低減にはどのような要因が影響しているのかという点までは十分に検討できなかった。加えて、不安の解消や chum-group のポジティブな機能を増進させるような取り組みに関しては実証的な実践研究が期待されるところである。

今後の研究では、内面までも peer-group に至っているものとの比較研究やこのような不安の低減に効果的な教育プログラムの実践効果検証等を通して、排他不安や友人分離不安の低減に関する影響を明らかにすることが求められているといえる。

引用文献

- Dunn, J. (2004). *Children's Friendships: The Beginnings of Intimacy*. Blackwell Publishing.
- 榎本淳子 (1999). 青年期における友人との活動と友人に対する感情の発達的变化 教育心理学研究, **47**, 180-190.
- 榎本淳子 (2000). 青年期の友人関係における欲求と感情・活動との関連 教育心理学研究, **48**, 444-453.
- 保坂亨 (1998). 児童期・思春期の発達 下山晴彦 (編) 教育心理学Ⅱ 発達と臨床援助の心理学 東京大学出版会, 103-123.
- 保坂亨・岡村達也 (1986). キャンパス・エンカウンター・グループの発達の・治療的意義の検討 心理臨床学研究, **4**, 15-26.
- 石田靖彦・小島文 (2009). 中学生における仲間集団 の特徴と仲間集団との関わりとの関連～仲間集団 の形成・所属動機という観点から～ 愛知教育大学 研究報告, **58**, 107-113.
- 石本雄真・久川真帆・齊藤誠一・上長然・則定百合子・日瀧淳子・森口竜平 (2009). 青年期女子の友人関係スタイルと心理的適応および学校適応との関連 発達心理学研究, **20**, 125-133.
- 高坂康雅 (2010). 青年期の友人関係における被異質視不安と異質拒否傾向-青年期における変化と友人関係満足度との関連- 教育心理学研究, **58**, 338-347.
- 高坂康雅・池田幸恭・葉山大地・佐藤有耕 (2010). 中学生の友人関係における共有している対象と心理的機能との関連 青年心理学研究, **22**, 1-16.
- 黒沢幸子・有本和晃・森俊夫 (2005). 女子中学生の友人関係のプロフィールとストレスとの関連について 目白大学心理学研究, **1**, 13-21.
- 黒沢幸子・森俊夫・寺崎馨章・大場貴久・有本和晃・張替裕子 (2002). 「ギャング」「チャム」「ピア」グループ概念を基にした「仲間関係発達尺度」の開発-スクールカウンセリング包括的評価尺度 (生徒版) の開発の一環として- (財) 安田生命社会事業団研究助成論文集, **38**, 38-47.
- 楠見幸子・狩野素朗 (1986). 青年期における友人概念発達の因子分析的研究 九州大学教育学部紀要 (教育心理学部門), **31**, 97-104.
- 三島浩路 (2003). 小学校教師がイメージする男子・女子児童の「いじめ」, 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 (心理発達科学), **50**, 123-132.
- 三島浩路 (2004). 友人関係における親密性と排他性-排他性に関連する問題を中心に- 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要, **51**, 223-231.

- 落合良行・佐藤有耕 (1996). 青年期における友達とのつきあい方の発達的变化 教育心理学研究, **44**, 55-65.
- 佐藤有耕 (1995). 高校生女子が学校生活においてグループに所属する理由の分析, 神戸大学発達科学部研究紀要,**3**,11-20.
- 須藤春佳 (2012). 女子大学生が振り返る同性友人関係—前青年期から青年期を通して— 神戸女学院大学論集, **59**, 2, 137-145.
- 杉浦健 (2000). 2つの親和動機と対人的疎外感との関係—その発達的变化— 教育心理学研究, **48**, 352-360.
- Sullivan, H.S. (1953). The interpersonal theory of psychiatry. New York : W.W.Norton. (サリヴァン, H.S. 中井久男・宮崎隆吉・高木敬三・鑪幹八郎 (訳) (1990). 精神医学は対人関係論である. 東京:みすず書房
- 上野行良・上瀬由美子・松井豊・福富譲 (1994). 青年期の交友関係における同調と心理的距離, 教育心理学研究, **42**, 21-28.
- 有倉巳幸 (2011). 生徒の仲間集団の排他性に関する研究 鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要, **21**, 161-172.

研究業績

1. 学術雑誌等（紀要・論文集等も含む）に発表した論文または著書

【査読有】

- 1) 山崎茜・井上重美（2012）. ピア・サポートプログラムが中学生の対人関係能力に及ぼす影響の検討 ピア・サポート研究, **9**, 18-24.
- 2) 卜部匡司, 山崎茜, 石井眞治（2013）. 広島市における新たな平和教育プログラムの効果に関する研究 広島国際研究, **19**, 113-121.
- 3) 山崎茜（2014）. 思春期女子に特有な閉鎖的な友人関係の背景と介入に関する一考察 ピア・サポート研究, **11**, 11-20.
- 4) 山崎茜（2015）. 中学生女子の友人関係行動の背景要因の検討 ピア・サポート研究, **12**, 19-26.

【査読無】

- 1) 沖林洋平・山崎茜・山田洋平・小杉孝司（2009）. 青年期における仲間関係イメージと仲間関係構築の関係, 山口大学心理臨床研究, **9**, pp11-18
- 2) Yoshihiro Okazaki・Fumiko Matsuda・Motoko Miyake・Yuichi Kotegawa・Keisuke Yoshikawa・Teruya Simooka・Shota Takada・Helen Cowie・Shinji Kurihara・Toshiro Mori・Akane Yamasaki・Takashi Nakamura・Megumi Inoo・Aiko Morita（2010）. Peer Support Training at Fukuyama University :The Ways of Incorporating Peer Support in Daily Activity: A note for a speech, 福山大学こころの健康相談室紀要, **4**, 17-23.
- 3) 山崎茜・栗原慎二（2010）. クラス会議が問題解決能力に及ぼす効果：HKISでの実践を例として, 学校教育実践研究, **16**, 37-44.
- 4) 大田紀子・牧亮太・山崎茜（2011）. 笑いをういた保育に関する研究-手段として用いる笑いの有用性の検討, 幼年教育研究年報, **32**, 133-139.
- 5) 山崎茜・中村孝・山田洋平・枝廣和憲・長江綾子・栗原慎二（2012）. 香港における生徒指導・教育相談に見る日本の現状と課題への展望 包括的ガイダンス・カウンセリングプログラムの視察から 学校教育実践研究, **18**, 39-46.
- 6) 中村孝・山崎茜・山田洋平・枝廣和憲・長江綾子・栗原慎二（2012）. 教師の生徒指導に関する力量形成への示唆 -香港の教育局・大学・学校現場視察から- 学校教育実践研究, **18**, 171-178.
- 7) 枝廣和憲・長江綾子・中村孝・山崎茜・栗原慎二（2012）. オーストラリアの生徒指導と教育相談～オーストラリア・メルボルン視察から～ 学校教育実践研究, **18**, 31-38.
- 8) 長江綾子・枝廣和憲・中村孝・山崎茜・栗原慎二（2012）. 教師の生徒指導に関する力量形

- 成への示唆 -オーストラリア・メルボルン大学の視察から- 学校教育実践研究, **18**, 159-170.
- 9) 山崎茜・長江綾子・山田洋平・枝廣和憲・中村孝・栗原慎二 (2013). 米国の包括的生徒指導を支える仕組みに関する一考察 -CASEL 訪問を通して- 学校教育実践研究, **19**, 83-87.
- 10) 長江綾子・山崎茜・中村孝・枝廣和憲・エリクソンユキコ・栗原慎二 (2013). 米国における包括的アプローチに関する一考察 -PBIS の視察から- 学校教育実践研究, **19**, 73-82.
- 11) 中村孝・枝廣和憲・長江綾子・山崎茜・米澤崇・栗原慎二 (2013). 米国における教育委員会による貧困層への支援に関する一考察 -Specialized High School Institute (SHIS) の視察から- 学校教育実践研究, **19**, 65-71.
- 12) 枝廣和憲・中村孝・山崎茜・長江綾子・栗原慎二 (2013). ユースサービスと居場所 -アメリカのユースサービスの実際と日本のユースサービスの比較- 学校教育実践研究, **19**, 57-64.
- 13) 溝部ちづ子・石井眞治・古谷嘉一郎・齊藤正信・財津伸子・山崎茜 (2013). 教員志望学校支援ボランティア活動の教育効果に関する研究 比治山大学現代文化学部紀要, **19**, 31-44.
- 14) 米沢崇・山崎茜・栗原慎二 (2014). 校長・ミドルリーダーのリーダーシップ及び学校の組織風土と生徒指導の取組との関連 学習開発学研究, **7**, 51-58.
- 15) 山崎茜・沖林洋平・石井眞治・鈴木由美子・森川敦子 (2015). 平和教育が平和構築意識に及ぼす影響に関する研究 学習開発学研究, **8**, 241-244.
- 16) Mow Chiu Raymond CHAN, Shinji KURIHARA, Yukiko Ericson & Akane YAMASAKI (2015). Training of school guidance and counseling workers in Japan: Concerns and challenges for future development 学習開発学研究, **8**, 67-79.

【その他】

- 1) 柿坂佳代・長江綾子・山崎茜 (訳) (2010). 難しい親の対応 -保護者とのより良い関係の築き方- 栗原慎二・バーンズ亀山静子 (監訳), 溪水社, 105-168.

2. 学術雑誌等または商業誌における解説, 総説

【報告書】

- 1) 山崎茜 (2006). Peer Support in Canada 日本ピア・サポート学会第 10 次海外研修 (カナダ) 報告書, 106-107.
- 2) 栗原慎二・山崎茜 (2008). Peer Support in Hong Kong 日本ピア・サポート学会第 11 次

海外研修報告書, 58-59.

- 3) 山崎茜 (2009). Peer Support and School Counseling in Hong Kong 日本学校教育相談学会・日本ピア・サポート学会第12回海外研修報告書, 38-39.
- 4) 栗原慎二・米沢崇・山田洋平・山崎茜・エリクソンユキコ 2015 日本版包括的アプローチと生徒指導・教育相談研修プログラムの開発的研究 平成23年度～平成26年度科学研究費助成事業科学研究費補助金(基盤研究(B))(研究課題番号:23330204)(研究代表者 栗原慎二) 研究報告書, 3-15.

【その他】

- 1) 栗原慎二・山崎茜・長江綾子 (2015). マルチレベルアプローチ:日本版包括的生徒指導の理論と実践(第4回) マルチレベルアプローチとアセスメント 月刊学校教育相談, 29(8), 72-77.

3. 国内学会・シンポジウム等における発表

【査読無】

- 1) 山崎茜 (2009). 中学生の仲間関係における性差に関する研究:排他性と異質性の受容に注目して 日本教育心理学会第51回総会発表論文集, 625. (2009年9月 静岡大学)
- 2) 山崎茜 (2011). クラス会議による問題解決能力の育成-ピア・サポート活動への展望-(口頭発表) 日本ピア・サポート学会第10回研究大会. (2011年10月 奈良教育大学)
- 3) 山崎茜 (2011). 小中学生女子の仲間関係の発達を促す要因とは何か-親密性・排他性からの考察- 日本教育心理学会第53回総会発表論文集, 382. (2011年7月 北翔大学)
- 4) 山崎茜 (2012). 世界の包括的生徒指導とマルチレベルアプローチ(口頭発表) 日本ピア・サポート学会第11回研究大会. (2012年10月 水上館)
- 5) 山崎茜・沖林洋平・石井眞治・鈴木由美子・森川敦子 (2012). 平和教育が顕在的平和意識に及ぼす影響に関する研究 日本教育心理学会第54回総会発表論文集, 67. (2012年11月 琉球大学)
- 6) 山崎茜 (2013). 思春期女子の友人関係の特徴を考慮した予防的・開発的生徒指導 日本学校心理士会2013年度大会発表論文集, 104-105. (2013年8月 九州産業大学)
- 7) 高坂康雅・須藤春佳・山崎茜・岡田努 (2014). 思春期・青年期の友人グループのメカニズム-青年心理学の新展開-(自主シンポジウム) 日本発達心理学会第25回論文集, SS1-2. (2014年3月 京都大学)
- 8) 山崎茜 (2014). 女子の友人関係の発達の变化をふまえたピア・サポートプログラムの提案(口頭発表) 日本ピア・サポート学会第13回研究大会 (2014年10月 新潟青陵大学)